

7 三遠南信地域住民セッション

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

第13回三遠南信サミット2005in遠州の際にはじめて開催されて以来、今年度で6回目の三遠南信地域住民セッションとなる。三遠南信地域の住民をはじめ、住民団体やNPO法人、大学や行政の関係者が集い、交流や連携に向けて議論を重ねてきた。

今年度は、南信州における住民団体等のプラットフォームとなる「南信州交流の輪」の設立とともに「祭り・伝統文化」、「食文化」、「中山間に生きる」、「交流・往来をつなぐ」の4つのテーマで意見交換がなされた。



■開会あいさつ

南信州交流の輪代表世話人 関京子様

リニア高速移動時代に備え、日本のど真ん中にある特色ある素晴らしい地域に大きな夢を抱くとともにそれらを学び、誇りを持って全国に発信していく。この輪を徐々に大きくし、次世代、東三河、遠州に伝えたい。

■南信州交流の輪 設立宣言

南信州交流の輪代表世話人 木下利春様

それでは、まず開会に先立ちまして、南信州地域における住民連携組織の立ち上げを記念して、この場をお借りして設立宣言を行わせていただきたいと存じます。既に遠州及び東三河地域では、三遠南信地域の住民団体等のプラットフォームとなる「三遠南信市民連絡会」の形成に向けた連携組織等の環境が準備されていますが、南信州地域では今年に入ってから、住民連携組織の設立に向けた準備を進めてまいりまし

た。三遠南信地域の交流連携を実のあるものにしていくため、本日この三遠南信サミット2010in南信州を契機に、本組織のビジョンや今後の具体的な取り組みについて、皆様にお知らせするとともに、遠州、東三河地域の住民組織と一層の連携を図り、三遠南信地域の交流連携を前に進めていきたいと思っております。

それでは、南信州地域の住民連携組織「南信州交流の輪」の設立宣言文を伊東直幸代表世話人より朗読させていただきます。

■南信州交流の輪 設立宣言文 朗読

南信州交流の輪代表世話人 伊東直幸様

(宣言文の内容は78ページのとおり)

■東三河地域代表あいさつ

市民団体連携委員会委員長 原田敏之様

三遠南信市民団体連携委員会を4年前の三遠南信サミットin東三河の際に立ち上げた。その際には、遠州と南信州からも参加いただき賛同いただいた。

しかし、残念なことにその時作った連携組織は、三遠南信サミットの中で他地域とお付き合いする程度のものにしかならず、十分に動けるものに育たなかった。また、愛知大学三遠南信地域連携センターに事務局機能をお願いしていたが、大学の組織改革によってセンターでの事務局機能がなくなり、更に活動が停滞する状況

になっている。

現在「南信州交流の輪」のみなさんが持っている思いに対し、当時、私どもが目指してきたものも非常に近い考え方を持っていたつもりでした。ただ、ここまで明確な形で文章化するという作業までは追いついていなかった。このような形で内容を整え、整理した形で組織的にもここまで進められたことは、我々にとっても大いに励みになる。そういう意味では、南信州の大きな活躍のもとで、東三河地域としても協力を惜しまない形で参加させていただきたいと思う。

◆次の分科会において意見交換を実施

- 「祭り・伝統文化」分科会
- 「食文化」分科会
- 「中山間に生きる」分科会
- 「交流・往来をつなぐ」分科会

個々のテーマにおいて、それぞれの最近の活動状況を報告いただき、今後、変わりゆく三遠南信地域の生活環境にどのように向き合い、「今、我々がすべきこと」について意見を交わした。



■分科会意見交換内容の報告

<祭り・伝統文化>

コーディネーター

三遠南信地域を学ぶ会 河合清江 様

地域の祭りを何とかしなければならぬという人達が集まって意見交換を行った。

例えば、東栄町の花祭り。太鼓の音がうるさ

いと言われ、名古屋の街中で練習ができず、20年前に東栄町に移り住んだ設楽（したら）という太鼓集団がある。移り住んだ東栄町はたくさんの伝統文化があり、とても素晴らしい所だったが、最初はその伝統文化に関わっていいものかすごく心配した。しかし、祭りで太鼓をたたく以外にも、舞子として、また、お囃子や生演奏で参加するなど、祭りや伝統文化には多様な関わり方があった。今では、新たにそこで生まれた子ども達も祭りに参加している。



続いて、阿南町の新野の盆踊り。後継者不足でどうしようもない状態だったこの祭りでは、子ども達の音頭取りを始めたところ、子ども達も伝統文化に対して、真面目に付き合うようになった。クライנגアルテン（滞在型市民農園）に来ている域外（名古屋等）のみなさんも、これほどの活気がある祭りを見て驚いている。子ども達が参加する事で活気が出てきたという地域の事例が紹介された。

まずは、この地域にどのような祭りがあるのか、どのような芸能があるのかを知り、参加することが重要。神事は氏子に任せるとしても、芸能部分は、保存会という組織で、別の人が入ってもいいのではないか。そのように区分して関われば、元々あったものを大きく壊さずに伝えていくことが可能である。世襲制で役が続いている伝統芸能もあるので簡単には広げられないかもしれないが、多くの人に関わる方法を検討していくことが必要である。

今回、祭り・伝統文化のグループに参加して感じたことは、皆が守ろうとしているというこ

と。また、伝統文化と普通の祭りとは異なるということを知った。

<食文化>

記録者

南信州広域連合事務局 一柳和宏 様



各地域の豊かな食文化に関心を持つ住民団体等が参加して意見交換をした。

地域を知ってもらうこととお互いに地域を知ることが大切である。三遠南信地域の人が“食”を通して行き来することが必要である。

既に、三遠南信”炊き込みご飯の素”という山の幸、海の幸がコラボし商品開発が進められているように、三遠南信地域における食の融合という形は発展性がある。

また、パッケージの裏に地域の紹介を入れたり、商品PRする関係者の人脈(人的ネットワーク)の形成等が必要である。

そういう意味では、「食べること」を通じて人が集まる場や3地域の住民団体が情報交換を行う場が1年に1回だけの机上の会議で終わるのではなく、継続して定期的に交流し、更に現地でどう活かしていくかについて議論する場が必要である。

今回話し合ったことをそれぞれの組織のみなさんに伝えてもらい、引き続き交流の輪を広げていきたい。

<中山間に生きる>

コーディネーター

NPO 法人三遠南信アミ 三宅淳子 様

福祉、森づくり、農業、地域間交流、エコ(地域環境)の分野から参加いただいた住民団体等によって意見交換した。

中山間地域は、様々な課題を抱えている地域である。

特に「個人や個々の自立をどう促すか」が重要で、地域の理解を得ながら中山間地域が抱えている課題解決に取り組む必要がある。

また、中山間地域の宝物を村づくりに活かすことの重要性についても意見が出された。これは、言い換えれば、地域資源を活用してどのように経済効果を生み出すかということで、住民が意識を持って取り組むべきである。



また、それぞれの活動分野に携わるみなさんから意見をもらった。

中山間地域に生きることは、山に生きる専門家集団でもある。これに対しては、もっと誇りを持つべきである。山は資産であるという意識を持つ必要がある。山の専門家集団として、多様な業種と連携して環境商品を生み出したり、森林情報を提供するなどの活動により、新たな雇用や価値を創出することが大切である。

そういう意味では、来年、三遠南信の住民セッションを売木村でやろうという意見もあった。

<交流・往来をつなぐ>

コーディネーター

愛知大学 平川雄一 様

交流にはどのような形があるか、ということについて議論を重ねた。

今までは見に来るだけだった観光が、徐々に

祭りやイベントに参加してもらって進める形ができあがってきている。

また、イベントを行うだけではなく、後に何か形に残るものを生み出す交流が大事である。更には、来訪者に対して何か価値を見つけてもらおう、来た人に対して喜びや楽しさを感じてもらおうもてなし、世代間交流、同世代交流が必要なのではないか。

それから、前から言われていることだが、この地域のファン作りが必要。実際にそのような活動をしているグループもいる。

このような交流を進めていくには、情報の発信が不可欠である。インターネットや紙媒体等の様々なツールがあるが、まだまだできていない。そのためには、情報発信のベースとなる基地が必要である。



また、年に1回の住民セッションだけ交流するのではなく、何か別の機会を作り、情報の発信をする必要がある。そういう意味で、先程「中山間に生きる」グループからも報告があったように、来年の売木村での交流会開催の提案についても、大いに期待をするところである。

■まとめ

南信州交流の輪代表世話人 木下利春 様

みなさんの共通認識として、この地域を何とかしていかなくてはいけないということをそれぞれお持ちだと思う。今回の住民セッションを最終的にどのように活かしていくかということが大事なことである。

三遠南信地域での交流や連携は、大きな力を

生み出すきっかけになる。これからもご協力をお願いしたい。

■開会あいさつ

次回開催地域代表 松田不秋 様



住民セッションを開催して6年目。住民セッションが大きく変わった。最初はプラットフォーム論に議論が偏り、どうやってその枠組みを作っていくかという形式論に忙殺された。

今回、初めて本音で語り合う住民セッションとなった。いよいよ幕が開いたと感じており、大きな期待を寄せている。

来年は浜松での開催となることから、今回の思いをそのまま持っていきたいと思っている。

浜松は合併があり、現段階では皆が同じ土俵で議論できる状況にはないが、徐々に変わりつつある。

浜松へは、今回のセッションをそっくりそのまま持ち運んでもらいたい。

■「南信州交流の輪」設立宣言文

宣 言 文

私たち「南信州交流の輪」は、東三河・遠州・南信州の「三・遠・南信」の地域が、いかなる歴史や特性をもって、今日を築いているかを学び、お互いの地域間の交流を深め、未来を築いていきます。

「三・遠・南信」地域は、古くは道を通して、県境を越えた交流が文化・経済とも盛んであり、また日本のどまんなかという主要な位置から、大きく七つの特性を持っています。

- ひとつ、この地域が日本のどまんなかにあることから、日本の約70%の多種多様な植物があること。
- ふたつ、かつては東西南北交通の結節点にあり文化・経済の集積地であったこと。
- みつつ、群雄割拠の時代にはこの地域が主要な位置にあったこと。
- よつつ、県境の村々に受け継がれる祭り文化が日本古来のものであること。
- いつつ、食が豊かであること。
- むつつ、時間がゆっくり流れていること。
- ななつ、結いの精神に代表される支えあう暮らしがあること。

私たちは、この七つの特性を全国に誇ることのできる宝と考え、そのために自らの目で地域を見て体感し、県境を越えた地域間の連携を確認するとともに、この地域ならではの物語を創造し、付加価値をつけて全国に発信してまいります。

近い将来、この地域にリニア中央新幹線が通ると、生活空間は大きく変貌していきます。その時に、ここに住む人たちが、この地域の文化を誇りとして語ることができ、当地域の産業や風土が全国に注目されるように、明確なビジョンをもって活動をしていきます。

具体的には、

- 一、 会員は「学び、体験し、交流する」プログラムを作成し、それに参加します。
- 二、 会員は東三河と遠州の会員と協力し合い「三・遠・南信」の魅力を学んでいきます。
- 三、 会員はそれらの基礎的学習を通して、何をどのように全国に向けて発信していくか、中長期スパンのプログラムを作成します。
- 四、 それらの活動は毎年開催されるサミットにて報告し、目標を再確認していきます。

本日十一月十二日を、私たち「南信州交流の輪」の活動開始の記念日とします。

平成二十二年十一月十二日

南信州交流の輪 代表世話人 関 京子
伊東 直幸
木下 利春